

これはこの本から抜粋しています。

1964——日本が最高に輝いた年
敗戦から奇跡の復興を遂げた日本を映し出す東京オリンピック

ロイ・トミザワ／著

来住道子／訳

「気持ちは晴ればれ」

元氣あふれる東京オリンピックからわずか二週間後、一九六四年東京パラリンピックが一月八日から一二日にかけて開催された。それは、身体障害者ができることについて日本人が抱いていたイメージや印象をがらりと変える大会となった。

海外からは数百人の出場選手がやってきたが、そのパフォーマンスや振る舞いは日本人からみれば手本となるものだった。日本財団パラリンピックサポートセンター理事長の小倉和夫の論文「1964東京パラリンピックが残したもの」によると、障害のある外国人選手たちの存在やその振る舞いは、それまで身体障害をもつ人々に冷たかった日本社会に衝撃を与えた。パラリンピックの選手村の管理者の話では、障害をもった外国人選手たちがとても生き生きと人生をめいっぱい楽しんでいる様子を見て驚いたという。そのときのことを小倉はこう書いている。

徐行している村内循環バスの後ろにつかまって車椅子のまま走っている選手にもびっくりさせられたが、インターナショナルクラブでの楽しそうなダンスパーティー、夜タクシーをつかまえ、車椅子をつみ込ませて渋谷の盛り場に繰り出してゆくグループを見ているとむしろぼう然とさせられたものだった。

一九六四年パラリンピックに出場した日本人選手には、準備期間がほとんどないのも同然だった。障害者スポーツに関して日本で組織立った動きが見え始めたのは、一九六〇年代初頭からにすぎなかったからだ。それでも、国際舞台で自分の力を試す機会に恵まれ、日本の出場選手たちは精いっぱい競技に打ち込むことができ胸を躍らせていた。

フェンシングに出場した青野繁夫は、日本でのパラリンピックによって自信を深め、生まれ変わったような気持ちになっていた。

フェンシングに於て、私達の技は確かに練習期間も八ヶ月という短期間で、西欧の伝統に対応しようとするのであるから、考えれば無茶という人もあったと思うが、私達は敢然とそれに斗い、とにかくやり抜き、銀メダルを獲得出来たことは、（中略）やれば出来るという自信を強く味わわしてくれた。その自信は以後の私達の生活に、大きな示唆と勇気を与えてくれることとなった。

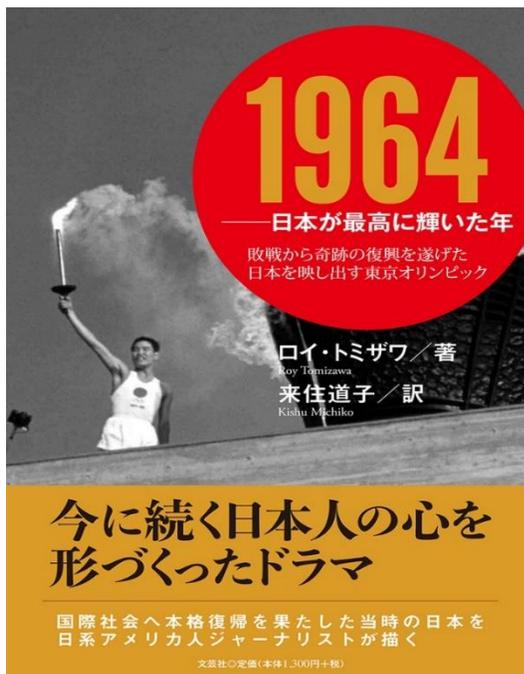
円盤投げに出場した小池正義は、もっと端的にこう述べている。「こんな晴ればれとした気持ちを味わえ、たのしかった」

自信をつけていくにつれて、日本人選手たちは、できないのではなく、できるのだという意識を抱くようになった。東京にやってきた外国人選手たちが大会運営側の介助を断り、日本の一般的な障害者たちよりも活動範囲を広げている姿を見て勇気づけられた。また、健康や体調の自己管理がずっとしっかりできているところにも、外国人選手たちのより自立した面がうかがえた。

外国人選手たちの自立心が強いのは、日ごろから体力や運動能力を高める努力をしている表れでもあった。日本人選手たちは日常生活の中で体力を維持強化することの重要性を再認識するようになったが、そのきっかけはパラリンピック期間中に負傷する日本人選手の多さを目の当たりにしたからだ。競技中に日本人選手二人がアキレス腱を切り、さらに一四人が別の箇所を負傷した。

つねに注意を払って慎重に接することが必要な身体障害者に対しては、つい過保護になってしまうものだ。だが、一九六四年の東京パラリンピックを客席やテレビを通して観戦していた人々の目に映った出場者たちは、障害を負った被害者ではなく、真のアスリートだった。小倉はある競泳選手の例を取り上げている。

ある外国の女性選手。ご主人に抱きかかえられてプールにはいった。スタート。みるみる遅れた。先頭の選手がゴールインしたとき、彼女はまだ五メートルぐらいしか進んでいなかった。ブクブクと沈みかけてはまた懸命に浮ぶ。二メートルぐらい後ろから救助員が、万一に備えてついて泳ぐ。彼女の顔が何度目かブクブク沈みかけたとき、救助員が助けようとした。が、プールサイドのご主人は手を振って押しとどめた。あと二メートル、一メートル。それがなかなか進まない。スタンドの観衆は拍手をしつつける。二十五メートルを泳ぐのに、三分以上かかったが、とうとう泳ぎきった。こうして、有識者やスポーツ関係者の間に、「身障者スポーツを本来のスポーツと考え育てる必要がある」との意見が表明されるようになったのである。



このような出来事のおかげもあり、政府は障害者の可能性にも目を向けるようになった。厚生省の井手精一郎は「日本は昔から障害者を隠しました」と認めたくえで、そうした状態から「障害者を顕在化させる」方向への転換こそが、新たな日本が目指すべき新しい目標であると断言している。

一九六四年東京パラリンピックによる大きな影響は医療界にも及び、変革をもたらすことになった。医師や医療施設は病気の治療や予防だけではなく、リハビリテーションの必要性にも注目するようになったのだ。一九六四年のパラリンピックに出場した選手のような可能性を秘めているかもしれないのに、障害があるからといって諦めてしまえば、障害者たちの大部分が自信や喜びを得る機会を奪われてしまう、といったことが認識され始めたのである。小倉はある医療関係者の言葉を挙げている。

近代の医療はシカを追う者山を見ずのたとえのとおり、疾病だけ考えてその母体たる人間は無視されてきた。——（中略）——セキ髄損傷の場合も同様である。その医療が障害に対する治療だけでなく、患者の回復を目的としていたなら、現在のセキ髄損傷患者はもっと回復度の高い状態にあり、パラリンピックはさらに楽しいものだった

たに相違ない。

外国人選手たちが使っている器具類についても、実物を目にした日本人は大きな衝撃を受けた。一九六四年にパラリンピックの外国人選手やコーチ、運営関係者が東京にやってきたときに持ち込まれた器具は、日本にはないものばかりで、すぐさま日本の規格が見直された。小倉は車椅子についてこう述べている。

パラリンピックの開催が、技術面で与えた影響は、何ととっても、当時未だ十分日本では発達していなかった、障害者用の器具、用具の開発、普及へのインパクトであった。とりわけ、車椅子の性能や、収尿器などについての、外国と日本との格差には目立つものがあつた。この点について、中村裕氏は、つぎのような感想をもらしていたという：「車いすの違いもはっきりと判つた。イギリスのスポーツ用車いすは、重さが十三キロである。日本の車いすは二十三キロだ。重さだけでなく、外人選手は体に合わせた車いすを使っていたが、日本は体格などに関係なく、サイズは全員が同じもので、一つしかなかつた」

日本人選手は、自分が使っている車椅子の性能が、外国人選手の車椅子と差があることによってパフォーマンスにも差が出ていることを思い知らされた。ある日本人選手はこう言っている。「外国選手はからだが大い割に車いすの扱い方がすごくうまい。われわれはむしろ車に使われているという感じでした。でももっと練習すれば車いすを使いこなせる自信がわきました」

一九六四年のパラリンピックは、日本社会に多大な意識変化をもたらすきっかけとなつた。東京パラリンピック開催のキーマンの一人であつた中村裕医師は一九六四年に、今日においても非常に重要な言葉を書き残している。

一般に社会は、身障者の能力を実際以下に低く評価する傾向にあるが、このような大会は第三者に彼らの能力を再認識させるよい機会を与えることにもなり、その意義は大きい。